2　村田の歴史

古代～中世

町の歴史は、旧石器時代まで遡ることができ、縄文・弥生時代の遺跡も見つかっています。古墳時代の遺跡が多く、120基ほどの古墳が確認されており、祭祀遺跡も発掘されています。町の南部に位置する関場地区には、全長90メートルで宮城県内第3位の大きさを誇る前方後円墳・愛宕山古墳があります。奈良・平安時代の遺跡としては、北沢遺跡や梅ケ久保遺跡などが知られ、竪穴住居跡などが発掘されています。

村田館は、鎌倉時代後期から南北朝時代頃の陶器片が出土しているため、この頃に築かれたものと推測されます。安永７年(1778)にまとめられた地誌『柴田郡村田郷風土記御用書出』には、京都より下向した公家が「お館様」として住み始め、それが16代続いた後に、村田氏が居城したと記されています。

室町時代の嘉吉年間(1441～1444)、下野国小山氏の流れをくむ小山九郎業朝が合戦に敗れ、奥州へ落ち延び村田に住んだと伝わります。小山氏は村田姓を名乗り、「村田殿」と称されました。永禄８年(1565)、6代村田近重には男子がなかったため、伊達家14代稙宗の九男宗殖(万好斎)を後嗣としました。これによって、村田氏は伊達家の一家となりました。その後、村田氏は7代にわたって、西根荘村田郷(現在の村田町大字村田から大字足立付近)を領しました。

天正19年(1591)、所替えに伴い米沢から岩出山へ向かっていた伊達政宗の側室・飯坂の局は、村田館で長男兵五郎を産みました。飯坂の局はそのまま村田にとどまり、兵五郎は３歳まで村田で育てられました。兵五郎は元服して秀宗と名乗り、後に宇和島藩10万石の藩祖となりました。

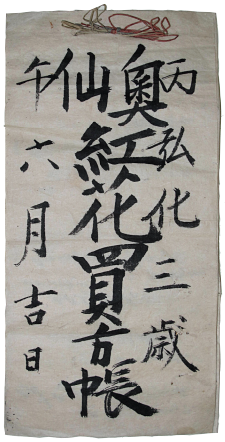
近世

伊達家一門の石川昭光は、慶長８年(1603)に政宗から隠居所として村田館を与えられ、慶長15年(1610)まで館主となりました。元和４年(1618)、政宗の七男宗高が柴田郡と刈田郡の３万石を知行し、村田館に着任しました。寛永３年(1626)に宗高が20歳で亡くなった後は、伊達家の御蔵入地(領主の直轄地)を経て、奥山大学、田村右京、大松沢和泉など、館主が度々替わりました。貞享元年(1684)に芝多常春が村田郷を拝領し、以降、芝多氏は８代にわたってこの地を治めました。慶応２年(1866)、芝多氏は加美郡谷地森村の領主であった片平氏と領地を交換し、間もなく明治維新を迎えました。

町場は、小高い村田館より東に見下ろす位置に置かれました。このような都市計画が行われた時期は定かではありませんが、村田商人の草分けと言われる山奥備後(後に山田姓へ改姓)は、天正年間(1573～1593)に越前国福井から遠刈田を経て村田に移り住んだと伝わります。従って、その頃には商業地としての素地があったものと推測されます。明和９年(1772)の地誌である『封内風土記』には、市店のある駅と記され、更に『柴田郡村田郷風土記御用書出』には、本町、荒町、南町の三町を合わせて「村田町」という宿場があり、その長さは五丁拾四間(約570メートル)あったと記されています。

町の中央を南北に通る街道(現 町道町中央線)は、南は大河原へ、北西へは川崎・笹谷峠を経由して山形へ、北東へは菅生を経由して仙台城下へと通じていました。街道の名称は、『柴田郡沼辺村風土記御用書出』によると「羽州海道」と記され、また、足立(現在の字大関)にある享保５年(1720)の道標には「もかみ海道 かわさき道」と彫られています。これらの名称より、街道は川崎や山形方面への主要な交通路であったことが窺えます。

市神の石碑



紅花の取引に関する古文書（村田町歴史みらい館蔵）

近世の村田商人は、紅花、米、太物、古着、荒物、塩などを商い、金融業なども活発に行いました。特に紅花は、最も収益の高い代表的な商品でした。村田における紅花の取引は、遅くとも18世紀初期に始まったとされます。村田は、柴田郡や刈田郡等仙南地方で生産された紅花の集荷拠点となりました。村田に集積された大量の紅花は、荷造り後に上方や江戸へと出荷されました。上方への輸送は、笹谷峠を経て山形の大石田（おおいしだ）で船に積替え、最上川を酒田まで下り、更に北前船による日本海航路を用いました。このように村田は、上方への流通経路の主流であった西回り航路へ繋がる山形方面への交通の便が良いため、上方と仙南地方を結ぶ中継地の役割を担ったことが、町の繁栄を導いた要因の一つと言えるでしょう。

村田商人は、京都で紅花等を売って得た金で、帰り荷として上方の物資を大量に仕入れ、地元に帰って商売を行いました。空船で帰るような無駄はせず、効率よく商売を行っていたのです。

近代～現代

村田郷は、明治22年（1889）に近隣の３つの村と合併して「村田村」となり、更に明治28年（1895）には「村田町」となりました。商業については、明治15年（1882）頃には化学染料の普及により、紅花の取り扱いはなくなりますが、その他の江戸時代以来の商品は引き続き扱われました。そして新たに、紅花に替わって味噌、醤油、生糸、薪、炭、紡績糸、洋反物、繭などの集散地となりました。有力商人の中には、株主や大地主として新たな活路を見出す者もあり、昭和期に至るまで商業地としての繁栄は続きました。

戦後以降は経済基盤の変化や生活の近代化、自動車交通網の発展などにより、それまでの商業地としての役割は薄れました。しかし、近世から近代にかけて築かれた町並みは姿を留め、当時の繁栄ぶりを今に伝えています。

大正時代の町並みの様子（本町）

昭和初期の町並みの様子（本町）

重要伝統的建造物群保存地区選定までの道のり

町の人口は、昭和25年の１万６千人が最多で、その後減少の一途をたどります。一方、昭和48年に東北自動車道村田インターチェンジが設置され、昭和50年代には工業団地が造成されて企業の誘致が行われました。更に、昭和63年に東北自動車道と山形自動車道を結ぶ村田ジャンクションが設置されたため、交通の利便性が向上しました。

昭和40年代頃から、土蔵造の店舗などは、時代にそぐわない等の理由により、正面を近代的意匠の壁で覆うといった改造や、建て替えのための取り壊しが相次ぎ、町並みの連続性が途切れる部分が生じました。昭和50年代後半からは、残された土蔵造の建造物が観光資源として見直され、昭和61年には全国小京都会議に加盟しました。その後、平成２年に地域住民と町職員によって「歴史と文化の香るまちづくり委員会」が設立され、町独自のまちづくりが議論され始めました。その成果として、村田城（館）本丸跡等を整備して城山公園とすると共に村田町歴史みらい館が建設されました。平成５年には財団法人（現公益財団法人）日本ナショナルトラストによって、本町・荒町・河原町の歴史的な建造物の調査が行われ、報告書が刊行されました。これにより、町並みは建築史や文化財の専門家から注目され、全国的に知られるところとなりました。

江戸時代後期に紅花商人として威勢を誇った大沼正七（おおぬましょうしち）家の建造物群が、平成10年に町へ寄贈され「村田商人やましょう記念館」として開館しました。その後、大沼正七家の分家である大沼孫十郎（おおぬままごじゅうろう）（初代）家も町へ寄贈され、「村田町ヤマニ邸」として住民の活動の場や観光案内所等として活用されることになります。現在は両者共に、住民と来訪者の交流拠点となり、保存地区に係る各種情報発信の場ともなっています。

町並みで行われる伝統行事として、10月上旬に行われる「蔵の町むらた布袋まつり」が挙げられます。地域住民が参加する一大行事で、布袋人形を載せた山車が町並みを巡り、布袋ばやしの笛の音が秋空に響きます。また、平成10年からは「むらた町家の雛めぐり」、平成13年からは「みやぎ村田町蔵の陶器市」が開催されています。いずれも、保存地区の伝統的建造物が活用されており、毎年町内外から大勢の人々が訪れ活況を呈します。更に、平成17年からは「蔵ing村田新そばまつり」が開催され、保存地区を会場に地場産品を活用した取り組みも行われています。

平成23年３月11日に発生した東日本大震災では、多くの歴史的な建造物が被害を受けました。損傷が大きなものもあり、修理をあきらめ取り壊されたものも少なくありません。そのため、これらの被災した建造物の修理や景観整備の対策が早急に必要となりました。

そこで町は、歴史ある建造物の修理等を行いながらそれらを活用して町の活性化を図るために、伝建地区制度導入の方針を示し、検討を開始しました。平成25年４月より、伝建地区決定に向けた本格的な準備に取り掛かり、平成25年11月に「村田町伝統的建造物群保存地区保存条例」が制定されました。平成26年３月には「村田町村田伝統的建造物群保存地区」が都市計画決定され、同時に保存計画が告示されました。そして、文部科学大臣へ申出を行った結果、平成26年９月、重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

みやぎ村田町蔵の陶器市